

# 第1章 幼保小連携の意味・意義

## 1 子どもの意識、成長を考えて

### (1) 戸惑う子ども

次の事例は、小学校に入学したばかりのある子どもの話である。

年長児のヒロ君は小学生になることをとても楽しみにしていた。10月には小学校の5年生のお兄さんやお姉さんたちに案内されて、小学校の探検をさせてもらった。大きな体育館、先生のようにやさしく説明してくれたお兄さん、お姉さん。どれをとってもわくわくすることばかり。入学するのが楽しみだと、うれしそうに話していた。

4月になり、ヒロ君は、新しいランドセルを背負い、はずんだ足取りで小学校へ通い出した。しかし、だんだん元気がなくなり、重い足どりで通学するようになってきた。学校へ行くことが楽しくないのだろうか。そんな姿を心配した保育者は、下校時にヒロ君に声をかけてみた。

「ヒロ君、1年生、入学おめでとう。」

「うん…。」

いつもの元気なヒロ君らしくない。

「毎日楽しく学校に通ってるかな？」

「う～ん…。」

「ヒロ君どうしたの？何かあった？」

「うん、いろいろね…。」

「どんなことなのか、教えてくれる？」

「うん…。まずね、どうして、先生、あれしなさい、これしなさいってよく言うのかな。ほくたち、言われなくてもできることもあるんだけどな…。あと、一度にたくさん言われると何していいのか分からなくなっちゃうんだよ。」

「先生方は、早く小学校生活に慣れてほしくて、一生懸命教えてくださっているんだと思うわよ。」

「そんなにたくさん言われなくても、ほくたち、だんだん小学生らしくなれると思うんだよね…。」

「そうね…。ヒロ君たち、幼稚園では何でもできてたんだもんね。他にも何かあるの？」

「あのね、小学校の1時間って、長すぎるよ。どうしてあんなに長いの？」

「そんなに長くないはずよ。ヒロ君が幼稚園で夢中に遊んでいた時間より、ずっと短いんだから。」

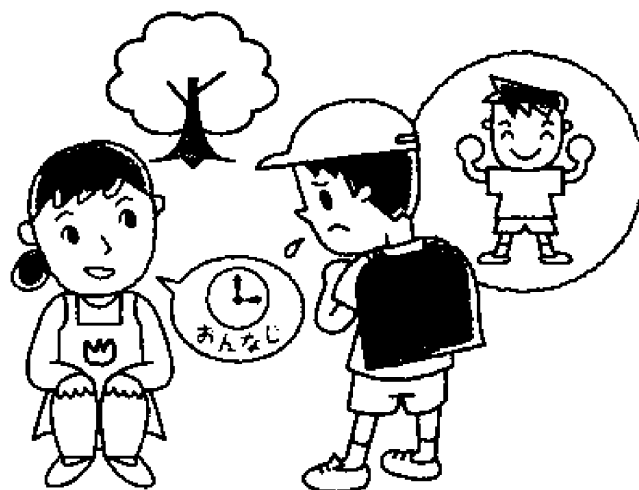
「え…？本当？ あとね、もう一つ、このランドセル、重すぎるんだよね。肩が痛くて、疲れちゃう…。」

ヒロ君は悲しそうに言うと、「じゃあね、先生。」と言い残し、とぼとぼと家に帰って行った。

そんなヒロ君も、6月になる頃には、再び元気に弾んだ足取りで学校に通うようになっている。

小学校入学後、6月になっても適応できず、学習に集中できない、教師の話が聞けず授業が成立しないという問題…。1年生の担任が、大変苦勞しているといった事例は県内でも見受けられる。

「1年生になったから」という教師の期待が強いと、何をどうすればよいか戸惑う子どもや、先生の期待に応えきれずに悲しくなる子どもも出てくる。小学校では、生活や学習に適応できない子どもたちには、何か問題があるのではないかという見方をしがちであるが、子どもの目線に立ち、子どもの意識を考えてみる必要がある。



小学校入学時の学習や生活に対して、全ての子どもがヒロ君のような思いではないだろうが、「何かが違う・・・」と感じている子どもも少なくないのかもしれない。ヒロ君が語った3つの思い、「先生の指示が多い」「学習時間が長く感じる」「ランドセルが重い」は、小学校での生活全体を、教師の視点からではなく、子どもの視点からちょっと見直してみることで、子どもの成長を円滑につなげていく教育ができるものと考えられる。

## (2) 見えない子ども、見えて気づく子どもの危機

「今年は、どうも落ち着きない子どもが多い。何をするのか予想もつかない。教師の指示に対して、幼いなりに理屈を言う。自分の思いは言うが、人の話は素直に聞けない。」

これは、入学式後数週間たった学年会で、担任がつぶやいた言葉である。

このような子どもたちのほとんどは、やがて、教師の言うことをよく聞き、学校生活に適応していくことになる。しかし、中には我慢して耐え忍んでいる子どももいるということを考えていかなければならない。このような子どもは不安や不満を内面に溜めているのだが、顕在化するまで時間がかかるため、親や教師にも気づかれにくい。

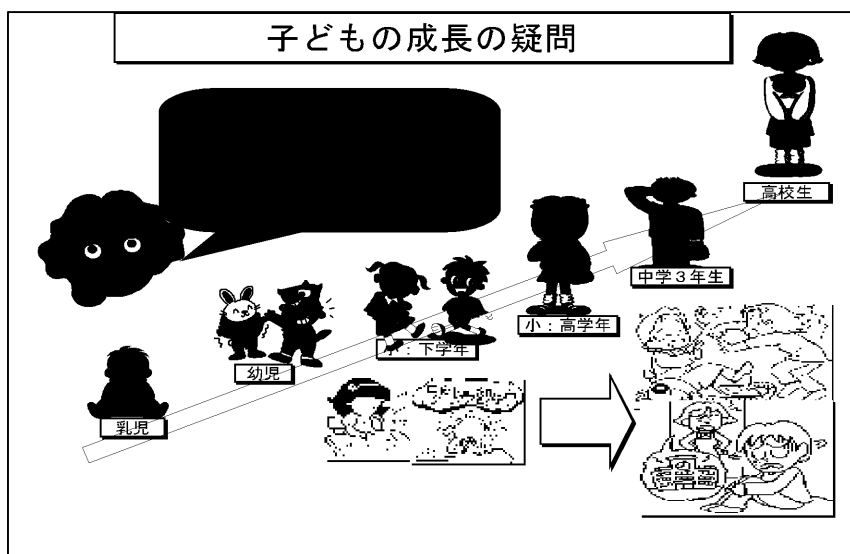
さらに、子どもの発達に着目し、子どもの成長を見ていくことにする(下図参照)。小学校4年生頃まで親や教師の言うことを素直に聞く「よい子」だった子どもが、小学校高学年頃から反抗するようになったり、閉じこもったりし、中学校で不登校や生徒指導上の問題を起こしてしまう場合がある。

子どもの内面はなかなか見えないが、小学校の1～4年生頃までは、強い力に対して素直になる傾向がある。だから、大人の言うことをよく聞く「よい子」に見えるが、自分の考えを表出したり、自分の意志で行動したりする自主性は、むしろ、幼児期より低下して思われる。

また、表面上は親や教師の言うことをよく聞く

「よい子」に見えても、実際は、プレッシャーを感じ、強いストレスを持っているということも考えられる。

小学校高学年から中学校にかけて不登校になる子どもの40%以上が、理由の特定ができないものになっている。子どもが成長していく中で、少しずつ内面に溜めてきた不安や不満に気づくことは難しいことである。だからこそ、子どもの教育に携わる者は、子どもが健全で幸福な発達をとげるために、各発達段階で達成しておかなければならない課題や、幼児期から小・中学校の時期のどの時期においても共通して大切に育てていきたいことをしっかりと抑えていく必要がある。



## 2 幼保小一貫して育む「自主性」と「思いやり」

右の図は、幼児期から小・中学校の時期の教育を通してめざしていきたい子どもの姿を示したものである。

中学生の生徒の数学の学習の様子であるが、自立した「協同的な学び」で、仲間と共に考え合い、表現し合いながら学習している。

ユキエが自分の解き方を説明しているのだが、サトシが「わからない」と質問している。タケシも一緒に説明するがサトシは理解できない。カナコはそんな3人のやりとりを真剣に聞いている。

ユキエとタケシとカナコの3人はサトシのために別の解き方を考えることにした。サトシがわかりやすいように絵や図をかいた。公式は使わずに解き、みんなで丁寧に説明した。

ついに、サトシが言った。

「やっと、わかったよ。ありがとう。」3人はとても喜んだ。

「私もよくわかってなかったみたい。サトシ君に感謝だわ。」

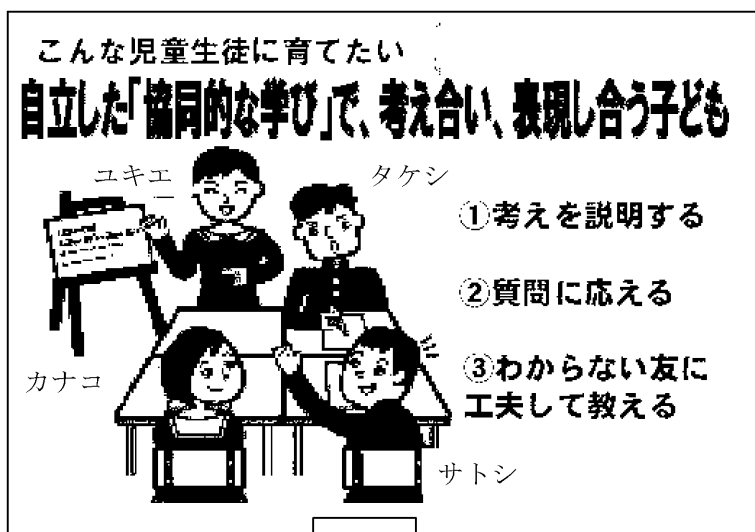
カナコも、自分の学びを素直に振り返った。

「サトシ君が、どうして?と質問してくれたので、みんなでいろんな方法を考えることができてよかった。」

と、タケシは、サトシのためにみんなで知恵を出し合ったこと、そして、自分の解き方は違う別の解き方を考えることができたことに満足している。

ここには、自主的に学び合う姿がある。自分の考えを説明できる子、「わからない」と言える子など自分の思いを素直に表現できる姿がある。そして、何よりも、相手のことをよく理解し、「思いやり」の気持ちで支え合う姿がある。この4人は、本時の課題に対する理解度は違っているが、一人一人自己肯定感を持って授業を終えている。このような子どもたちは良好な人間関係の中で安心・安定が保障され、充実した学習を創ることができる。

このような協同的な学びの中に見える「自主性」や「思いやり」は、簡単に育つものではなく、幼児期から小中学校の時期、一貫して育てていくことにより、子どもの成長と共に高まっていくと考えている。



山形県では、『幼児共育アクションプログラム』の中で、めざす幼児期の子ども像を、「自然の中で遊ぶことが大好きで、人やモノにかかわり、何事もすすんで取り組む子ども」としている。特に幼児期において、「遊び」を大切にしながら、主に「自主性」を育てながら、人やモノとのかかわりの中で社会性として大切な「思いやり」を育てていく教育を推進していきたいと考えている。そして、「自主性」と「思いやり」は、幼児であっても、児童・生徒・学生であっても、社会人としての大人であってもすべての人間の生き方の基盤であり、幼保小一貫して育て、成長とともに高めていきたいと考えている。

ここでいう「自主性」とは、

- ① 自ら考え、行動（表現）すること（自発）
- ② 独り立ちすること（自立）
- ③ 自分自身で立てた規範に従って行動すること（自律）

の全てを含むものである。

特に幼児期には「自発性」を大切にしたい。好奇心が旺盛で、目的意識をもつと自発的に行動する時期である。集団生活のルールや友とのかかわりより、自分の思いが優先され、行動する。しかし、友とのかかわりで好ましくない言動があれば「トラブル」が起き、そこで、トラブルを解決していく術を体験的に学んでいくし、善悪の判断ができなかった場合は、「それでいいのかな？」と諭され、どうすべきであったかを子どもなりに考える。考えられないとしても、好ましい行動についてしっかりと教えられる。

小学校では、このような自発性をさらに高めながらも、目の前の困難を克服していくことのできる自立した子どもを育てていきたい。そして、いろんな人やモノ、社会とのかかわりの中で、自分自身で立てる規範に従って行動できる人間に成長していくものと考えている。

「思いやり」とは、

- ① 心を配ること
- ② 想像・推察すること
- ③ 思慮・分別があること

の3つを考えている。

右に示したものは、相手の思いを察した行動で、相手をよりいかにすることができた事例である。

A男に「心を配り」、A男の内面を「想像・推察」し、学級の中でA男をどう支えていくか考えた「思慮・分別」のあるB子の行動は、幼児期からの「思いやり」を育む一貫した教育を通して育つものである。

## 友の思いを察し(想像)、そのよさを引き出せる子ども

○ある学校における5年1組の「朝のスピーチ」の時のことである。その日は、A男が話題を提供し、みんなで話し合いをすることになっていた。  
 ○話題を考えてこなかったA男はそのことすらも言えず、緊張したまま黒板の前に立ち、黙り込んでしまった。  
 ○そんなA男を察してか特に仲良しでもないB子が、「A君さ、今朝、校舎に入る前に1年生の男の子をおんぶして遊んでいたでしょ。そのこと聞きたいな。どうして、いつも、1年生と遊んでいるの？」と聞いた。  
 ○A男はびっくりしたようであるが、B子の質問に答えるようにたどたどしく、  
 ・その男の子が友達と一緒に遊べないこと  
 ・いつも自分にいたずらすること  
 ・遊んであげるととても喜ぶこと等の話をした。  
 ○すると、A男の「やさしさ」に共感した学級の友達は、次々に質問した。自分の経験や、1年生と遊ぶのはいやなこと等、正直に語る子どももいた。



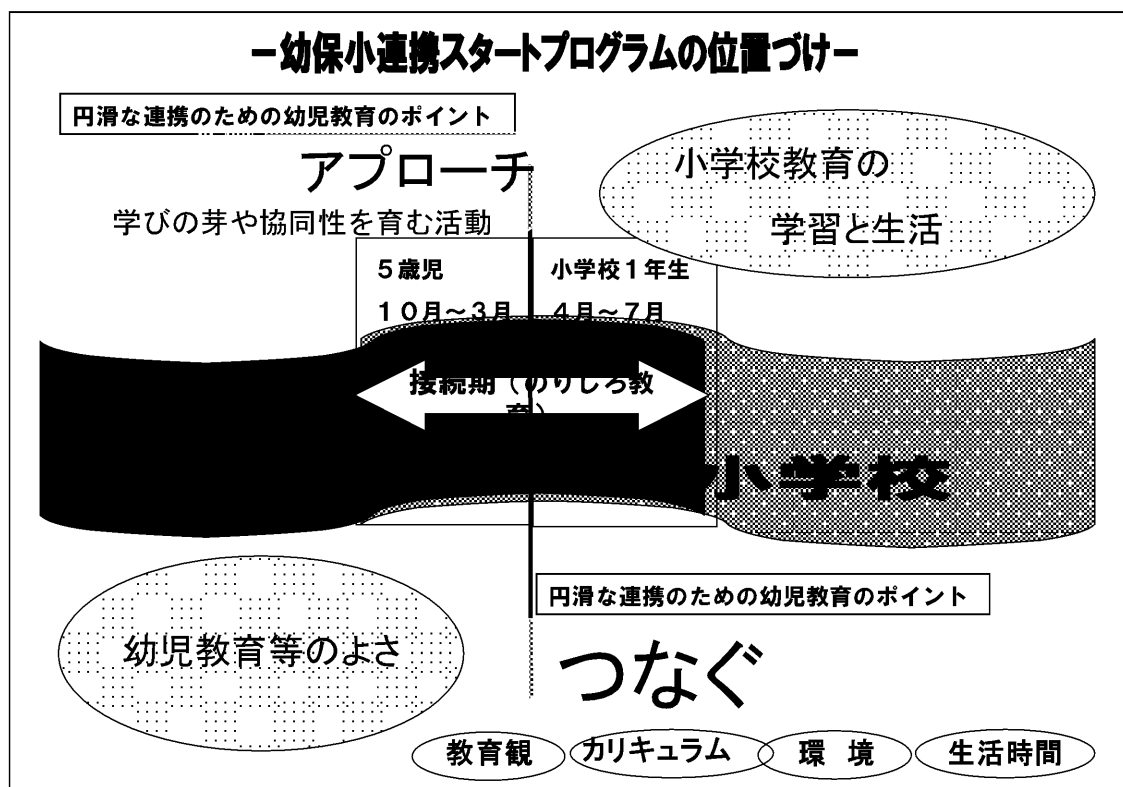
「遊び」の重要性を幼児教育機関等と小学校が共通理解し、発達段階に応じた適切な教育を施すことで、「自主性」や「思いやり」を大切に育てていきたいものである。そのためにも、幼児教育機関等と小学校が今まで以上にお互いを理解し合い、学びのつながりの中でそれぞれの役割を見直していく必要がある。

### 3 幼保小連携スタートプログラムでめざすこと

#### (1) 幼保小の円滑な連携に向けて大切にしたいこと

幼保小が連携の意味・意義を述べてきたが、子どもは「育つ環境」において健やかに成長していくのであるから、「連携」と言わなくても、子どもの成長をつないでいくことは、教育者の使命である。そこで、幼児教育機関等と小学校それぞれの子どもの成長と学びが滑らかに接続するため、特に、幼保小の連携を意識して教育にあたる期間（接続期）には、次のことを大切にしたい教育をしていく必要がある。

- ① 幼児教育等の重要性を再確認すること
- ② 幼児教育等、小学校教育でも等しく大切にしていきたい「自主性」と「思いやり」について、教育観を一にしてその芽を育てていく方法を共有すること
- ③ 年長児の後半は、小学校教育へのアプローチとして、「学びの芽」や「協同性」を育む活動を大切にしたい教育をすること。
- ④ 小学校1年の1学期は、『教育観』『カリキュラム』『環境』『生活時間』の視点から幼児教育等のよさをつないでいく教育を工夫していくこと



接続期については様々な考えがあるが、県としては、5歳児後期（10月～3月）から小学校1年生の夏休み前の時期までと考えている。この期間は、幼保小をつなぐ「のりしろ」と考え、幼児教育機関等と小学校の両者が互いの教育を尊重し、幼児教育等では小学校につながる教育を、小学校では幼児教育等で育った力をつないでいく教育を行っていくことが大切となってくる。同じ子どもの育ちについて共に語り合う関係を築くことで、「子どもをつなぐ」という視点から更に一歩踏み込んだ「教育課程をつなぐ」という視点に発展させ、今、自分たちが行っている教育課程のどこをどう変えれば、子どものよりよい育ちにつながるのかを考え、まずできることから取り組むことが大切である。

## (2) 接続期に留意していきたいこと

### ～子どもの目線に立って、「幼保と小の違い」を理解する～

接続期には、特に、子どもの思いに寄り添った教育を行っていくことが大切である。これは、幼児教育機関等あるいは小学校どちらかの教育方法に合わせるということではなく、子どもの成長のつながりの中でよりよい育ちのためにはどうしたらいいかということ、子どもの思いに寄り添って考えていくということである。

### ◇「遊び」と「学び」

小学校では、「遊び」と聞いてどんなことを思い浮かべるだろうか。鬼ごっこ、かくれんぼ、ドッジボール…。これらは学習と学習の間にあるものであり、子どもたちにとっては、息抜きの時間である。幼児教育機関等では、保育の時間に子どもたちがいろいろな「遊び」をしているわけだが、この「遊び」は、小学校でイメージする「遊び」とは大きく異なる。幼児教育機関等では、「遊び」こそが「学び」そのものなのである。

また、小学校の授業では、授業一つ一つに各教科や領域の目標があり、子どもたちは各単位時間の学びの中で確実に何かを身に付けていくことになる。しかし、幼児教育機関等では違う。全ての教育活動を通じて、5領域の内容が複雑に絡み合いながら身に付けていくものであり、この時間、この日に、こんな力が付いたと言いきれる性質のものではない。

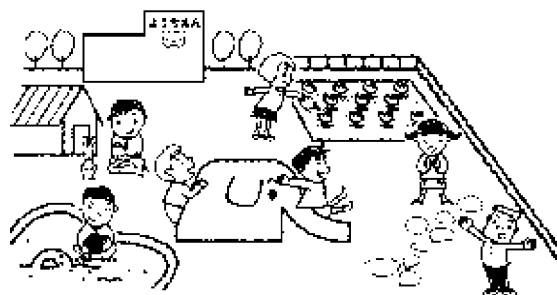
### ◇ 生活時間

幼児教育機関等では、子ども一人一人の興味・関心や活動内容の必要に応じて予定時間が組まれるが、ほとんどの小学校の場合、子ども一人一人の興味・関心には関係なく、時間割に基づいた45分の授業時間が流れていく。

子どもたちがおもしろくないと感じるとき、それは、耐え難い時間の長さとなる。しかし、多くの場合、それでもその間は「よい姿勢」でじっと我慢していなければならない。

### ◇ 環境構成

幼児教育機関等の多彩で曲線的な掲示やテーブル、コーナーなどの空間構成に比べ、小学校そして、中学校、高等学校では、学年が上がるにつれ、次第に無彩色の単調な世界になってくるのが一般的である。また、幼児教育機関等では、運動や読書、絵描き、工作など子どもたちが「～したい」と思うことが自由にできるよう、意図的に環境が構成されている。



### ◇ 集団行動

幼児教育機関等では、子ども一人一人の個性とペースが尊重されていたことと比べて、学校生活の多くは学級集団そろって行動することが求められる。全体に合わせて遅れやズレのないように、統一性や均一性が要求される。こうした要求は、子どものストレスを高めていくことになる。

このように、互いを理解するためには、まずは、互いの違いをよく知ることから始める必要がある。互いの違いを知ったうえで、その環境にどう子どもをあてはめていくかを考えるのではなく、子どもの思いに寄り添い、互いの教育環境をどう見直せばいいのかを考えていくことが大切である。